

「株価2万5000円」は本当にあるのか

元タカラジェンヌ **宮本真希** 「完璧裸身」をスクープ公開!

カラー **夏川みずず** 「ギリギリガールズ」の超熟ヘアヌード

二宮レポート **佐藤義則** 熱討「太陽にほえろ!」を語ろう



マッチに、マチャアキ、
郁恵ちゃんも登場

カラー特集

「歌のトップテン」
ここに復活!



パイロットは本当に焼き殺された

連続写真 イスラム国 この「火あぶりの刑」を見よ

定価420円

2/21 Weekly Gendai
2015 February

独占スクープ掲載

早稲田大学で
120分間にわたって熱弁

高倉健さん

「伝説の授業」入手



日本人殺害 安倍総理の選択は正しかったのだろうか

トマ・ピケティ「21世紀の資本」を簡単図解

後藤健二さんが私たちに遺したもの

この「原油安」は、とても気持ち悪い

「異変とこれから」

全国民必読

日本経済

大手商社が大損失!

モノクロ いま日本全国で読まれている

後藤健二さんが私たちに遺したもの

最後にババを引かないために、
いま知っておくべきこと



袋とじカラー

児島美ゆき「ハレンチ学園」ヌード

世界一受けたいセックスの授業「4限目
上手なセックスは「力」の入れどころ」で決まる

黒田とマエケン「男たちの友情」

熱いぜ、広島 二人のエースには二人しか知らない物語があった

自分は何歳まで生きるのだろうか、という不安にこたえる

それは初めから
決まっているんです

「寿命」の研究

連続スベシヤル

それは初めから決まっているんです

長生きしようとどんなに努力しても、叶わない人もいる。もうダメだと思っても、奇跡的に一命を取り留める人もいる。医者にも説明できないことを、どう受け止めればいいのか。

「寿命」の研究

——自分は何歳まで

生きるのであるだろうか、

という不安にこたえ

「寿命」の研究

命は人の手では延ばせない

人間の寿命というのは、医学の発展に伴い、適切な検診や治療を受ければ延ばせるはずだ。いや、そうではない、それぞれの人間の寿命は運命で定められているものだ——「寿命」についてさまざまな説が唱えられているが、確実なものは存在しない。

東洋哲学でも、「運命は生まれながらに定まっている」と主張する道家と、「努力によって人の運命は改善される」とする儒家の二大派閥が対立。2000年以上にわたって延々と論争が繰り返されてきたが、いまだに結論が出ていない。「寿命」とは、いったい何なのか。どうやって決まるものなのかを、改めて考えてみた。



長尾クリニック・長尾和宏医師（写真上）と宗教学者の山折哲雄氏

どんな腕のある医師でも、「なぜこの人は助かったのか」と首をかしげることがある。「運命」と言わざるを得ないケースだ。長尾クリニック（兵庫県尼崎市）院長の長尾和宏医師は、あるときこんな経験をした。「地元の医師会が運営する休日夜間診療所に、たまたま私が当番で詰めていた夜のことです。一人の男性がフラフラしながら訪ねてきた。彼が入ってきたとき、腰を抜かしそうになりました。私と顔がそっくりだったんです。背格好も一緒、年齢も当時45歳だった私と同じくらいで、まるで自分の生き写しに出会ったかのようでした」

その男性は、椅子に座るなりバタリと倒れ、そのま

ま心肺停止となった。心筋梗塞から致死性不整脈を起こしていたのだ。救急医療に長く携わっていた長尾医師は、直ちに蘇生措置を施し、大病院へ連絡した。「一緒に救急車に乗り込んで心肺蘇生を続けました。まるで自分に救済措置をしているような不思議な感覚でした。でも、男性はなかなか息を吹き返さな

い。30分経っても、容態は変わりませんでした」

心肺が停止してから1分経過することに、救命率は約10%ずつ低下していく。極めて厳しい状態だった。たとえ蘇生したとしても、重い後遺症が残るのは避けられない。呼吸も心臓も止まったまま、一刻と時間だけが過ぎていった。

そして、90分が経過。スタッフ全員が諦めかけたそのとき——。

「なんと、彼の心臓が再び動き始めたのです。しかも、どこにも後遺症がなく、2週間後には社会復帰されました。医学の常識では絶対に考えられない生還です。

90分も心肺が停止して、後遺症もなく無事に蘇生した例としては「日本記録」と聞いています。

たまたま救急医療に精通していた私とその日の担当で、なぜか私にそっくりな患者さんが現れた。ある意味、奇妙で奇跡的な巡り合わせでした」（長尾医師）

寿命は、医学の力以外に「本人の運命」が関わっているのではないかと200人以上の死に立ち会ってきた長尾医師は、こうした経験を通じてその思いを強くしたという。

医師にも理解できないような奇跡が現実起こっている。科学が進歩しても、どうにも説明のしようがない生死の場面にいくわすの

は、人には生まれ持った「寿命」があるからと考えると説明がつく。その意味で、この男性は助かるべくして助かったのかもしれない。

医師で作家の久坂部羊氏は、患者の命と向き合う中で「医療で寿命を延ばせるとは思わない」という結論に至ったと話す。

跡的な生還を果たすこともあるだろう。逆に、生まれ持った寿命によって、思いがけず人生を終えることもある。

元東京都監察医務院長の上野正彦氏（86歳）の妻がそのケースだった。これまでに2万人以上の遺体を検視してきた上野氏が「寿命」というものを意識したのは、自身の妻（享年72）を亡くしたときだったという。今から9年前のことだ。「家内は、亡くなる半年前までいたって元気でした。少し前に受けた健康診断でも異状はなかった。ですが、あるとき『階段を上るのがつらい』と言い出して、大きな病院へ行っただけです。すると、検査の結果、胃がんの末期だと診断されました。もう治療のしようがない、と。私も医者ですが、家内がそんな状態だと信じられなかった。『ヤブ医者にかかってしまったのだらうか』と思ったほどでした。余命は、あと半年ということでした。そんな急な宣告を受けたにもかかわらず、

家内は涙を見せたり、取り乱したりすることは一度もありませんでした。私のほうが動揺し、現実を受け入れることができなかった」

元区議会議員だった彼女は、入院中も精力的に仕事をこなしていたという。上野氏はその姿を見ながら、妻の死を想像することができなかつた。

だがそのとき彼女は、すでに「寿命」を悟っていたのかもしれない。余命宣告から1カ月が過ぎた頃、上野氏は妻からこう言葉をかけられた。

「あなたのお世話を最後までできなくて申し訳なかった」と言われたんです。年上の私のほうが早く死ぬものと、お互い思っていましたから。その翌日くらいから、彼女は眠ったままだを覚まさなくなつた。そして、入院から40日目に息を引き取りました」

余命半年という宣告に遠く届かない、あまりにも短い闘病生活だった。これも、彼女の「寿命」だったのだらう。上野氏は、今では妻

健診の帰りに死ぬこともある

の死をこう考えるようにしているという。「肉体は滅びても、死んでいないという感覚で生活しています。今日だって、お線香をあげながら『午後』に週刊現代の取材を受けるよ』なんて声をかけている。私の中では、家内は生きています。二人で生きてきた楽しい思い出がありますから、今は一人で生活するのは、今は一人で生活するのは、

がちよつと不便だなと思うくらいですね。精神的なつながりは、寿命が尽きても続いていると思っています」

寿命というものは肉体が「この世」に存在する時間。寿命を超えると、肉体は亡くなるが「あの世」で生きている——上野氏のように考えれば、大切な人が死を遂げたとしても、気持ちが楽になるのではないだろうか。

たとえ短い寿命だったからといって、それを「悲運だった」と嘆くことはない。「若い方の死はつらいことですが、本人は自分の人生にすごく満足していることもある。短命だったからといって不幸せだったとは言えないと思うのです」

「死ぬまでに決断しておきたいこと20」などの著書がある東邦大学医療センター大森病院（東京都大田区）の緩和ケアセンター長・大津秀一医師は言う。これまで看取ってきた1000人を超える患者の中には、若

「医者になった当初は、できるだけ患者さんの命を延ばすことを目的として治療をしていました。治る病気はそれでいいですが、治らない病気を無理に治そうとする悲惨な状況になる。そのことを身をもって経験し、だんだんとそう考えるようになってきました」

寿命というものは、そもそも医者にも患者本人にもタッチできないものではないでしょうか。一人ひとりの寿命は、運命的に決まっています。病気に限らず、事故や災害での突然の死も、本人が生まれ持っているもの。寿命は医療で延ばせるものではなく、「天命」という気がするんです」

宗教学者の山折哲雄氏（83歳）も、同様の考えを述べているという。

「人間の『寿命』とは、自分の力で獲得するものではありません。目に見えないもので、神や天などから賜ったものなのです」

たしかに命の長さが天から与えられた「運命」であるならば、冒頭のように奇

フロヘアなど仮装をして登場し、みんなを笑わせていました。そして笑った人の顔をカメラで撮影して、部屋に貼るんです。あつという間に彼の部屋は笑顔でいっぱいになりました」

余命と思われた3カ月が過ぎて、彼は生命力に満ち溢れていた。治療は何もしていなかったが、がんは大きくなっていかなかったという。そうして1年以上を生き、母親に見守られながら静かに息を引き取った。大津医師が続ける。

「四十数年という人生は確かに短かったかもしれませんが、ですが、彼はその倍を生きたくらい、濃い人生を送っていたと思うのです。彼は人を喜ばせることを生きた糧にし、皆の笑顔に彼自身がまた勇気づけられた。それが、推測された余命を超えて彼を生かした続けたのではないかと、そう感じました」

医学的にみた余命は、彼が本来持っている寿命ではなかった。たとえ病気になることも、その人の持っている「寿命」つまり、

早くも 阪急黄金時代を支えた 天才投手の栄光と悲哀の物語

伝説の 剛速球投手 君は山口高志を見たか

鎮勝也 講談社 定価/本体1500円(税別)

生きる力があれば医学の常識を超えて命が延びることだってあるのだ。

「自分は何歳まで生きられるのか」と不安に駆られることもあるだろう。寿命を延ばすために、健康診断を欠かさず受け、食事を節制したり、さまざまな健康法を試す人も多い。それは意味があることなのか。前出の上野氏はこんな話をする。

「非常に健康に気を使う60代の男性がいたのですが、健康診断を受けて『異状なし』という結果が出たのを喜んで病院から帰る途中、バタッと突然死してしまっただ。変死体扱いになったので、解剖すると心筋梗塞だったのです。健康診断では健康そのものという結果だったのに、いったいどういうことかと驚きました」

自身の妻の死や、こうした突然死の事例を見てから、上野氏は自分の健康に頓着しなくなった。

「よく、80歳過ぎてても顔がツやつやでお元気でいる秘訣は？」と訊かれるのですが、何もしてないんですよ。

いろいろな健康法があるけど、好きなことをしてストレスがないように生活するのがいいのじゃないかな。生きることに執着しすぎると苦しくなる。執着がなくなれば、楽になるんですよ」

死は理不尽にやってくる

70歳を迎えた昨年、「生前葬コンサート」を行ったシンガーソングライターの小椋佳氏は自身の「死」について次のように語る。

「私は、いつ死んでもいいと思ってるんです。死に対する不安はありません。僕よりずっと年上でも元気な高齢者の方もたくさんいますし、年下なのに突然亡くなってしまふ人もたくさん見てきました。ですから、死というのは、あるとき理不尽にやってくるものだと覚悟してらるんです。

胃がも経験しましたが、長生きするために何かを節制することもありません。タバコは50年間止められず、毎日40本吸っています。コカ・コーラは、アメリカ

男女ともに平均寿命が80歳を超えたいま、「せめて平均寿命までは生きたい」と思う人も多いだろうが、数字に縛られた生き方は、自分を苦しめるだけなのかもしれない。

に留学していた26歳の頃からずっと飲んでいて、2ℓのボトルを3日経たずに飲みきってしまうほどです」

小椋氏は「寿命」という概念はよくわからない」と言うが、氏が言う「理不尽にやってくる死」とはつまり、人には努力では変えられない「寿命」がある、ということだろう。小椋氏が続ける。

「青春時代、人生に絶望したときに自殺を考えたことがありました。でも、生き延びた。頭の中では『死ぬう』と思っていたのに、僕の心臓はちゃんと動いているし呼吸もして『生きよう』としていたのに気付いたんです。自分の身体の中に、『生きよう』とする命があった。

ですが、70歳を過ぎてからは、命の「生きよう」とするエネルギーが減退してきていると感じています。以前から、『自分は76歳で死ぬと思う』と言っていました。理由は無いけれどなんとなくそう思うようになってきたんです」

「生きよう」とするエネルギーが使い果たされるとき——それが「寿命」なのではないか。小椋氏のように、自身の寿命を見定めて、それに抗わずに受け入れる生き方もある。

「長生きしたい」という人間の欲望にこたえるために科学や医学が発展してきたわけだが、前出の山折氏は、そのことが「寿命」という伝統的な考え方を揺るがしている」と警告を発する。

「生命科学の進歩は、少数の人間を幸福にするかもしれません。病気が治り、人間の寿命まで人工的に操作できるという段階に達している。ですが、恵まれたおカネのある人だけが享受できる技術です。それは倫理的にはどうなのでしょう。

いま、天から与えられた寿命をそのまま受け入れることができない状況が生まれています。科学の進歩が、かえって高齢者の不安や恐怖感を増幅することにもなるのです」

長生きしたいというのは、誰もが抱く願いかもしれない。だからこそ、病気になるれば治療を受けるし、長生きするために健康に気をつけたりする。だが、寿命を人工的に延ばそうとすることでひずみが生じるのもまた事実。そうであるなら、「運命」を受け入れるのも一つの選択肢ではないだろうか。

それは簡単なことではないが、身近な人のつらい死を乗り越えてきた人の経験に、「寿命を受け入れる」ためのヒントがある。

エッセイストで、初代・林家三平師匠の妻の海老名香葉子氏(81歳)は、幼い頃、東京大空襲で両親、兄弟、祖母と家族6人を失った。しばらくは、「あれが寿命だったんだ」と思うなど決してできなかったという。「病気があったらまだしも、

「寿命」の研究

戦争の爆撃に命を奪われたのですから。お父ちゃんもお母ちゃんも、もつと生きられたのになんで死んだのよ、と泣き叫んでいました。家族は戦争のために殺されたんだと思っていました」

その思いが変わったのは今から35年前、47歳のときだった。夫の三平師匠が亡くなった年だ。

「夫は肝臓がが見つかったて検査入院をしたのですが、その途中に容態が急変し、亡くなったんです。がんはかなり進行していましたが、3カ月は持つだろうと言われていましたので、本当に突然のことでした。当時、夫はまだ54歳。若すぎる死だとたくさんの方が悼んでくださいましたが、私は、あれは夫の『寿命』だったと思ってるんです」

そう思えたのには、理由がある。亡くなる直前、ベッドに横たわりながら三平師匠は海老名氏にこう語りかけたのだ。

「僕は、好きな仕事を一杯やってこられて、こんな幸せなことはない。僕の人



生、幸せだった」

その言葉を聞き、海老名氏は初めて「人間には寿命というものがあるのだ」と悟った。

「自分の人生に満足して死んでいくのですから、それを残念だなんて言いたくないと思っただけです。だから、それはやっぱり寿命ですよ。だって『寿の命』と書くんですもの。そう言ってもらえて、嬉しかったですね。夫のあとをしつかり守っていいこう、と決意しました」

家族や友人が早すぎる死を遂げたとき、「あのとき、あれをしてあげていれば」などと過去を悔やむことは多い。でも、それを「これがあの人の寿命だったのだ」と思えば、前に進むことができるはずだ。

海老名香葉子氏のエッセイと小椋佳氏の写真(写真上)とシンガーソングライターの小椋佳氏

その日まで頑張って生きる

海老名氏は、夫の死を寿命だったと理解したことです。苦しみから解放された。そして、「死者のあとを継いで生きる」という決意をしたが、それこそ、「寿命」を受け入れるのに必要なことなのだ。釈氏が続ける。

「息を引き取った瞬間に、その人のすべてが終わるとは思えません。想いや願いというのは、その人が関わった人たちの中で生きていくものでしょう。『こんなふうに生きてほしい』『こんな社会になってほしい』な

り、避けることはできません。愛する人を亡くしたときに『なぜこの人が死ななくてはいけなかったんだ』と悩んだり、自分の死を恐れるのは、仕方のないことなのです。我々は『なぜかわからない』という不安状態に置かれることで苦しむ。そんな中、『寿命』という考え方は、苦を引き受けるシステムのひとつと言えるかもしれません」

ど、亡くなった方の遺志は、死を越えても続く『物語』なのです。その物語に耳を傾けてみればいいのです」

「夫のあとをしつかり守っていいこう」という言葉どおり、海老名氏は林家一門の中心となって支えている。三平師匠の死後、自身も乳がんなどの大病を経験したが、「命を取り留めた」。

「まだ寿命ではないのかもしれません。お父さん(三平師匠)から『来なくていいよ』と言われていたみたい。ただ、寿命は長かろう

が短かろうが、夫のように最後に『ああよかったな』と思える生き方をしたい。自分のできるだけのことはやった、と。そのために、まだ頑張りたいと思っっています」(海老名氏)

自分の死を恐れるばかりでなく、自分が「死んだあと」に想いを馳せてみてほしい。前出の釈氏が言う。「16世紀に活躍したドイツの神学者ルターは、こう言いました。『明日世界が終わるとしても、私は今日リノゴの木を植える』と。

たとえ寿命が明日尽きるとしても、次の世代のためにこれをするのだと思えば、寿命とうまく向き合えるのではないのでしょうか。そうすると究極的には、寿命は一つの通過点になる。死ぬことですべてが終わるわけではないのですから「死」は恐れるものではない。寿命は生まれながらに決まっているのだ、それは一つの通過点にすぎないのだ、と考えれば、いまを生きる意味が見えてくるのではないだろうか。